

立矢博士キュリー・メダル受賞

本学会会員立矢正典博士がポーランドからマリー・スクウォドフスカ=キュリー・メダルを受賞しました。

このメダルは、ポーランド出身で放射線研究に偉大な業績を残したキュリー夫人を記念して 1983 年に創設された賞で、放射線物理学、放射線化学、放射線生物学、放射線医学の分野で顕著な貢献をした研究者に、3 年に 1 回授与されます。毎回全分野で合計約 3 名の研究者に授与されています。今回の受賞者は、立矢博士のほかに、ドイツの E. Illenberger 博士とポーランドの M. Forsys 博士で、授賞式はポーランドの Ciedlce で開催されたポーランド放射線研究学会で 9 月 20 日に行われました。放射線化学分野では、これまでにイギリスの A. Charlesby 博士、F. S. Dainton 博士、フランスの A. Chapiro 博士、J. Belloni 博士、アメリカの R. H. Schuler 博士、ドイツの C. von Sonntag 博士、ロシアの A. K. Pikaev 博士等が受賞しています。日本からの受賞者は立矢博士が初めてです。



写真 1 授賞式の様子

(日本放射線化学会 編集委員会)

櫻井 洸先生を偲んで

昨年(2010年)10月に櫻井 洸先生が91歳のご高齢でお亡くなりになり、先生の追悼記事を書くようにとの編集部からの注文が参りました。しかし私は先生と一緒に仕事をしたことはなく、せいぜい二三の国際会議などでお話をしたくらいでした。ところが、思い出してみますと、先生が日本化学会賞の候補におなりになったとき、私が選考委員の前で先生の業績の説明をすることになりました。これは、先生のご指名で、結果見事に賞を受けられましたが、なぜ私がこの重責を果たさなければならなかったのか大変迷いました。その当時のことはすっかり忘れていましたが、いま先生のご経歴などを拝見していくつか思い出すことがありますので、これについて関連したことを述べ、追憶に代えさせて頂きたいと思います。

先生は、京都高等工芸学校染色科から大阪帝国大学工学部化学科を経て大阪大学に奉職され、おそらく工業的にも大切な油脂に関する研究に従事されたのだと思います。私は詳しくありませんが、油脂化学は有機合成のみならず、機械工学など広く工学関係にとっては不可欠な物質でしょう。したがって、油脂の改良、新しい油脂の開発など問題は限りなく多いことであろう。このような研究、開発の手段として先生はいち早く放射線化学の知識を取り入れられた。油脂完成の研究者にとって放射線

化学は高根の花、もしくは考えもできなかった方法だったに違いない。放射線化学の知識をもっておられた先生にとって、油脂の改良、新しい油脂の開発などは独壇場だったに違いない。おまけに、光化学的な知識をもっておられた先生はこの分野でも楽しまれたことでしょう。

化学会賞の説明には、もっぱら放射線の特質、光化学の効果などを重点的に説明すれば良かったので、私が説明の重責を負わされたのだと思っている。油脂のことなどは何も知らなくても任務は果たされたのでしょ。放射線化学の“純粋培養研究者”は、他分野の研究者を納得させるのがしばしば困難である。先生はこの逆を行かれたといつてよい。先生は、「賞を取るためには、多くの人たちに対して、十分な根回しをすることが必要だ」と言っておられた。放射線化学を発展させるためには、放射線化学のことだけを強調することも必要であるが、対象とする物質、現象の核心部分に対する、放射線の効果を強調することが今まで以上に必要ではなからうか。

沈滞気味(!)の放射線化学の今後の進路を考える一つの方法を櫻井先生がお示しになったような気がします。改めて先生の先見の明に感謝して、追憶の記といたします。

(理化学研究所名誉研究員 今村 昌)

櫻井 洸先生の思い出

元日本放射線化学会長の櫻井洸先生が2010年10月1日に亡くなりました(享年90歳)。櫻井洸先生は、日本放射線化学会の黎明期からご尽力され、現在の学会の創設と発展に大きく寄与されました。この度、本学会よりご依頼がありましたので、弟子の一人として櫻井洸先生の思い出をここに記させていただきます。私は1977年4月から1980年までの3年間を博士後期課程の学生として櫻井洸先生の研究室に所属し、光化学と放射線化学の研究をさせていただきました。その頃の櫻井研究室には、放射線化学研究の高椋節夫助教授、光化学研究の朴鐘震博士と土岐進助手、油化学研究の岡本能樹助手がおられました。櫻井洸先生は研究室の学生に常に暖かい気配りをされていました。いつどこでお会いした時でも、笑顔でしかも大きな声で学生の名前を呼んであいさつをされ、威勢の良い元気づけの言葉をいただきました。その頃の先生の笑顔と笑い声が今でも記憶に残っています。先生は整理整頓を好まれ、特に本やジャーナルはいつも同じ本棚の同じ場所に並べられていました。ご自身もいつも身だしなみに注意され、すべてがオーダーメイドのイニシャル入りのシャツ、ロンドン生地のスーツ・コート・マフラー・手袋、イタリア製の靴とカバン、スイス製の時計を身に着けられ、2週間毎の散髪は欠かさず、常に背筋を伸ばして歩かれるという非常にダンディーな先生でした。また、昼食にはフルコースの洋食をゆったりと食べられていました。教授としての仕事は山のようにあったことと思いますが、余裕をもって優雅な振る舞いをされていたことが印象的です。昼食抜きか、パソコンを行いながらサンドイッチをつまみ、週日はもちろん週末も早朝から深夜までコマねずみのように働いている今の教授とは雲泥の差です。

年に一度のご自宅付近の堺の百舌鳥八幡宮の布団太鼓という祭時には、研究室一同がご自宅に招待され、滝のある素晴らしい中庭で美味しい料理をいただきました。先生は美術品がお好きで、ご自宅には芸術品レベルの陶磁器や絵画があふれていました。特に、ドイツのマイセンの磁器がお好みでした。門下生や関係者が先生の紫綬褒章や日本化学会賞などの受賞や退官の記念としてお祝いをした時なども、ご自身で金額を継ぎ足してマイセンの磁器を購入されておられました。櫻井洸先生が教授室

に飾られていた花器や西洋の絵画を、私がそのまま引き継いで教授室に飾っています。また、先生の教授室は大変立派で、靴が隠れるほどの毛足の長い分厚い絨毯、高級なソファ、机、椅子、金庫、エアコンなどを使用していました。これらは先生が購入され、産業科学研究所に寄付されたとのことでした。学生時代、徹夜実験の時は、この絨毯の上に寝かせていただき、毎朝、秘書の方が掃除に取り掛かるときに起こされました。

櫻井洸先生は、研究室ハイキング、合宿などの研究室行事にもよく参加されていました。毎日、早朝散歩をされていて姿勢よく歩かれるお元氣な姿が印象に残っています。研究室の忘年会・送別会・新人歓迎会などの宴会は、先生のご希望で、必ず座敷でのお膳を囲みました。宴会の最後は必ず全員で阿波踊りを踊って、万歳三唱で終了するというのが決まりでした。

櫻井洸先生は大阪大学を1982年に退官された後、奈良工業高等専門学校校長、初代奈良先端大学学長(1997年まで)などの要職を勤められました。櫻井先生の放射線化学研究室は、先生のご退官後、高椋節夫先生が引き継がれ、さらに高椋先生のご退官後、1997年から私が担当しています。産業科学研究所では3代にわたって同じ経験の教員が研究室を担当していることとなります。私が教授に昇任してからもいろいろとご指導ご鞭撻をいただきました。教授の行うべき仕事とすべきでないこと、必ず秘書を雇用して教授が行うべき仕事のみを行うことなどをご教授いただきました。さらに、私に対して、産業科学研究所放射線実験施設を利用した新しい放射線化学研究を行い、その成果を世界に向けて発信すること、先端的研究を行うことで日本放射線化学会をリードし、本学会が益々発展し世界の放射線化学研究の中心的存在になることを強く希望されていました。先生のご要望はまだまだ実現できていませんが、今後、一層の努力によって、先生のご希望に沿うように新たな放射線化学研究を展開し、世界の放射線化学研究の分野で大きな貢献をしなければと気持ちを引き締めております。

最後になりましたが、櫻井洸先生の生前のご指導ご鞭撻に心より感謝申し上げますとともに、ご冥福をお祈り致します。

(大阪大学産業科学研究所 真嶋 哲郎)